

欧州の金融不安の中で、イタリアの長期金利が上昇してきた。しかし、日本の長期金利はまだ低水準にとどまっている。

7月16日のブログで、クルーグマン教授は、手短かに両国の状況を比較し▽国内総生産比で高い水準の公的債務を抱えていること(日本の方が高い)▽高齢化が進んでいること(日本の方が急速)▽政治の機能不全(日本の

日本の長期金利安定はいつまで

日本総合研究所理事 翁 百合



方が良く見えるということがありうるだろうか？——など類似点は多いのに、なぜ日本の長期金利は安定しているのか、という問題を提起し、

「自分は、
 確固たる
 答えを持
 ち合わせ
 ているわ
 けではないが、重要なパ
 ズルと言えるだろう」と
 結んでいる。

日本の長期金利が安定
 的である背景として、国
 債が国内で95%消化され
 ていること、今後の税の

引き上げ余地があること、魅力的な国内の投資対象が限られていること、などがしばしば指摘される。確かに日本では、現状、家計と企業部門からなる民間部門の貯蓄超過が続く、政府の資金不足と海外の資金不足を賄う状況が続いている。しかし、高齢化の進行は貯蓄の取り崩しにつながるから、この面から見ても、長期金利安定に確固とした基盤があるとは言えない。

イタリアよりも厳しい政府債務を抱える日本の

今後の長期金利がどう推移するかは、むしろ、内外の投資家が今後の日本の政治・経済状況をふまえて、日本の将来についての判断をいつ・どのように見直すかに決定的に依存する。

現在の日本とイタリアの違いの原因について断定はできない。しかし、必要なことははっきりしている。政治の混乱から抜け出し、長期的な経済成長と財政再建の青写真について一刻も早く国民的なコンセンサスを作っていくことである。